
私の王子様

神崎 優太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の王子様

【Nコード】

N6173N

【作者名】

神崎 優太

【あらすじ】

白馬に乗った王子様が夜、デートに誘いにくるという話をクラスメイトから聞き、すっかり信じこんでしまった舞子。
毎晩、王子様が来るのを待ちつつづけます。幾晩かが過ぎ、ついに現れた王子様。その姿は……？

「ねえ、知ってる舞子？」

暑い夏が過ぎ去って虫たちの声が耳に届き始めたその頃、舞子のクラスはある噂でもちきりでした。クラスの女の子達の何人かが、空から舞い降りてきた王子様と深夜のデートをしたというのです。

仮面をつけた王子様は夜空を駆ける白馬に乗って現れ、女の子にデートを申込むといいます。

「えーそんなの嘘に決まってるよ」

そういう舞子でしたが、それからというもの、毎晩、窓辺にたたずんで、夜空を見上げるようになりました。

でも舞子のところにはなぜか王子様は現れません。

毎晩、毎晩、待ち続ける舞子。

「どうすれば、王子様に会えるの？」

授業中、クラスメイトにこっそり、聞いてみます。

「トカゲおどりをして待つよ」

その晩、クラスメイトの言うとおり、舞子はトカゲの真似をして舌をピロピロと出し、目の玉をグルグルと回しながら、片足立ちで踊ります。

「きみ、おつかしいね？なんなのその踊り？」

その声に振り返る舞子。窓の向こうには、月明かりを背にした一人の青年がいました。そして、なんと、彼は空に浮かんでいたのです。

「ついに、私の王子様が……」

しかし、全身銀色の衣服を着たその姿は、王子様というよりはまるで宇宙人の様。しかも、彼は舞子の踊りのあまりの可笑しさに笑いが止まりません。

「あなたこそ変よ、ほんとうに王子様なの？」

「ああ、そうさ！僕の星では、男の子が生まれるとみんな王子様と

して育てられるんだ。ちなみに僕以外にも4億8千万人くらい、いたかな？」

彼が何かを言う度に、頭から二ヨロリとのびたトンガリぼうしの先にある玉が、怪しげな光を放ちます。自慢気にそう言う彼に、舞子はがつくりと肩を落としてしまいました。

「そして、15才になると花嫁を探しに他の星へ行くんだよ！」

「花嫁？私が！？」

驚いて、顔を上げた舞子に彼が言います。

「あーはっはっ、トカゲおんなを花嫁に？冗談が上手いね、キミ！」
全身、銀色の王子様は腹をかかえて苦しそうに笑っています。

頭にきた舞子は、部屋の窓を閉めてそのまま寝てしまいました。

「ついに私も王子様にあつたのよ！」

翌日、朝一番でそう報告した舞子をクラスメイトの女子達は指をさして大笑い。

「ばっかじゃないの、この子！あんなの嘘に決まってるじゃない」

「まさか、本気にするなんて！」

「トカゲおどりでよってくるなんて、どんな王子様よ！」

「だって、本当に来たんだもの！全身銀色で、頭の先がピカピカと

……」

言ってから、舞子は、はっと我に返りました。

そして、舞子はクラスを飛び出していきました。廊下まで響きわたるクラスメイト達の笑い声を背に。

舞子はその晩くやしくて泣きました。泣き付かれて寝てしまった舞子の肩を、トントンとたたく者がいます。舞子が目を覚ますと、開け放たれた窓の前に月明かりを受けてキラキラと輝く王子様の衣装を身にまとった青年の姿がありました。

「ぼくだよ」

それは紛れもない、昨晚の銀色宇宙人です。

「昨日はキミを怒らせてしまったからね」

彼はそう言うと、小さくウインクをしてみせます。

「姫、私と一曲踊っていただけますか？」

彼が差し出した手を舞子がとると、王子様は舞子の手をよせて、そつと口づけをしました。次の瞬間、舞子の体を綺羅^{きら}びやかなドレスが包み、驚く間もなく、そのまま、手をひかれ夜空を一步、二歩とあがっていきます。

舞子の足は、しっかりと夜空を踏みしめ、腰には力強い彼の腕の感触がありました。

眼下に広がる街の明かりがまるで、クリスマスのイルミネーションのように足元を照らします。

二人は月明かりの元、優雅にダンスを踊りはじめました。

その頃、舞子のクラスメイト達の携帯電話が一斉に鳴り響きました。

「舞子が、王子様と夜空で踊っているって!？」

メールには確かにそう書いてあったのですが、誰もがはじめは信じようとしませんでした。しかし、半信半疑で夜空を眺めると、そこには二人の姿があったのです。

くやしがるクラスメイト達。

それを見た舞子は王子様にそつと耳打ちしました。

「本当にそれでいいの？」

王子様は少し驚いた表情で舞子に問いかけます。

舞子は、うん、と照れくさそうに小さくうなづきました。

「それはいいや!」

王子様は、腰にさげた剣を引き抜くと円を描くようにふって、それ!と声をかけました。

すると、夜空を埋め尽くすほどの流れ星が降ってきてその一つ、一つが長い尾を引きながら、クラスメイト達の元へ飛んでいくと、眩^{まはゆ}い光の中から、素敵な青年達が現れたのです。彼らは、少女達を

エスコートして空へ、舞子と王子様の待つ空へと、ゆっくり昇っていきます。もちろん、色とりどりのドレスに身を包んで。

王子様が剣をもう一振りすると、別の流れ星が降ってきて、その一つが指揮者になり、別の一つがチェロ奏者になり、やがて一揃いの弦楽器と管楽器が揃うと、それは立派な楽団オーケストラとなりました。

大舞踏会のはじまりです。

華やかなドレスに身をつつんだ女の子達が、一つの大きな輪になってワルツを踊りはじめました。

「舞子、ありがとう」「舞子、ごめん」

誰かとすれ違う度、そんな声が舞子の耳に届きます。

それは、夢のような一夜でした。

次の日クラスのみんなは、王子様達と舞踏会のことを何も覚えていませんでした。

でも、舞子だけは今日も夜空を眺めてあの夜のことを思っています。

「つぎは、アリクイ踊りはどうかな？」

（後書き）

ジャンルは一応、童話にしましたが、ちょっとコメディかな？という気もしています。

どちらにしても、楽しんでもらえればうれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6173n/>

私の王子様

2011年5月15日19時55分発行